

## 匙かひの島

(筆名・小池昌代)

(あらすじ)

二十歳になるフミは、十年前、母の故郷であるこの島へ東京から移り住んだ。父は去年、家を出ていき、今は、母と祖母、弟と暮らす。ある日、東京から、三人家族が移住してきた。彼らが来てから、涸かれ井戸に水が湧いたり、怪魚騒動が起こったり。島から出たいと願っていたフミだが、島を囲む海の力に、ここで生きることを改めて考え始める。そんなとき、シロマのおばさんが、あの家族の家から赤子の泣き声がしたと言い出す。

晚おそい午後ごに、一隻いっしゅうの小型客船せうがたきやくせんが棧橋せきしよについた。カツオ漁かつおりしを終おえたいたいつもの船ふねが、三隻さんしゅう、定位置ていりしよに碇泊ていぱくしている。その左端ひだりはしに、小さな客船きやくせんは心こころなしか遠慮えんりよがちに停とまった。

フミは、棧橋せきしよから少し離はなれたところに建たつ、漁港組合りしよこうがわいの二階にがいからそれを見ていた。航海かいかいを終おえ、ゆらゆらと停泊ていぱくしている船ふねが、まるで考え事かんがえことをしている最中さいちゆうのように見える。あたりは物音ものねひとつしない。今いま、この光景ひかりげいを見ている人間にんげんは、自分の他ほかにいない気がきした。漁師りしよしたちは、みんな帰宅きたくし、今頃いまごろは昼寝ひるねの真まっ最中さいちゆうだろう。あと少し残のこった伝票でんひょう処理しりが終おわれば、最後さいご、戸締まりとじまりをして帰かえっていいことことになっている。事務所じむしょにはフミの他ほか、誰もだれいない。ラジオらじおからは安室奈美恵やすむすなみえの音楽おんがくが流ながれていた。

I'll be your hero.....

それがフミの耳みみに、「浴びやひろー」と聞こえてくる。この歌姫うたひめは、来年引退らいねんいんたいすると、この間このま、発表はつぷつしたばかりなのだ。四十歳しじゅうさい。デ

ビュー二十五周年という。熱狂するほどのファンではなかったから、がっかりはしなかったが、いきなりの引き波にフミは驚き、同時にどこかで納得もした。

そしてまだ幼い子供だった頃、東京のコンビニでこの歌手を見かけたことを思い出した。人形のように華奢で、小さな顔で、壊れてしまいいそうな可愛さがあった。

彼女の引退は早すぎる死か。死の先には再生があるとしても、彼女のなかでは何かが終わったのだろう。フミの四十はどんなふうにやってくるのか。身をもってそれを知るためには、あと二十年を生きなければならぬ。ばっちゃんと言う。昨日、生まれたと思ったのに、今日は鏡の中に、しわくちゃの女がいたサー。

一生はそのように、短いものであるらしい。問題は、「今」のけだるさ。この島には時間とこういうものが流れていない。今、今、今は数珠のように連なっていて、どんよりとたまった時間

の池を作る。思い詰め、島の突端まで行った人間が、海へ飛び込むことなく、必ずや内陸へと引き返して来るように、この島には独特の磁力が働いている。母のような力強い両腕で人を抱きしめ、こぼさぬよう、もらさぬよう、島の内に人を閉じ込める。フミはいらいらし、その腕を振り払い、島の外へと流れ出していきたい。流れた先で、思う存分、生きること始めるのだ――。

そのとき、視線の先で風景が割れ、船からわらわらと人が降りてきた。先頭の一人はフミもよく知る顔だ。船を操縦してきたのは彼だろうか。いつ見ても頼りない彼が、小型船舶の操縦免許をいつのまに取ったのだろう。彼の父は、カツオ漁にかけては、島の誰もが一目置く漁師だ。比べてこの息子は浮草みたいにフワフワ。みんなから魚のカツオにも劣ると言われ、その名の勝男までが、からかいの的になってきた。

その勝男に続いて出てきた三人は、フミの

初めて見る人々だった。若い夫婦と娘が一人。娘は縁の丸まった、上品な麦わら帽をかぶっている。

夏休みもとうに終わったこの時期に、子連れの観光客というのはまず、ありえない。人より荷物のほうが多いのも目を引いた。一個、二個：：全部で八つもある。勝男がそれを、実にきびきびと台車に積み込んでいく。あれは本当に勝男だろうか。やがてひとかたまりになった人と荷物が、段々ところらへ近づいてくる。フミはあわてて窓から離れた。

「フミちゃん、桜やまでタクシー一台、呼んでくれるかあ」

下から勝男の声が聞こえた。こんなときだけ、ちゃん付けで呼ぶ。次の瞬間、どこかと階段をあがってくる足音がして、いつものとぼけた顔が現れた。フミはわかったとも言わず、受話器をとりあげ短縮ボタンを押す。

「おじさん、桜やまでお願いしたいんよ、お客さん、待ってるんだけど、今すぐ来れる？」

シモジのおじさんは個人タクシーを商っているわけではない。しかし空いているとき車を出してくれる。この島だけの、いわゆる白タクだ。いつものことだが、寝ていたらしく、反応がふた呼吸くらい遅れたものの、アア、イイヨオと請け負ってくれた。

「桜や」は、この島のなかでは比較的新しい自炊型の民宿で、未亡人のマサ子さんが商っている。

フミは下にいるお客さんたちが、どこから来たのか聞きたくてたまらなかつたけれど、手元の仕事に没頭しているふりをした。すると勝男がしゃべりだした。

「無口なお客さんだー。あーんな静かな家族、見たことネー。事情あって、まだ住む家が決まらないんだと。そこで桜やで、家を探すあいだだけ暮らすう、言ってる。言葉聞いとると、東京のひとだなあ」

ふうん、とフミ。あんまり他人ひとさまのことに夢中になるんじゃないと、このあいだも、ばっちゃんから釘を刺されたばかりだ。――他人さまには他人さまの事情があるんよ。こつちからずかずか入っていかなくても、むこうさんが言うまで待てばいい。けんどいったん、つきあうとなったら、こつちも心開いて一期一会でつきあわんといかん。心開きば、道も開く――。

ばっちゃんの言うことは頷けるが、実践するのは難しい。

「お客さん、暑いなか、気の毒だワ。冷たいもんでも出そうか、ここへ上がってもらおう？」

フミが気遣うと、勝男はニヤニヤ笑いながら、

「フミが窓からこつちを見ておったの、丸見えだったからヨ。いっつも窓の外ばかり見てるに。いつ仕事するんネ。怠けはいかんよお。たーくさん、もらってるんだら」

なんて下品なことを勝男は言うのだろう。

「正社員じゃないヨ、まだアルバイトだあ。  
あんたが言うほど、もらってないワ」

「うはっ。フミはオレと違って頭いいもんナ  
ア。脇見してても仕事片付くト。下のお客さ  
ん、荷物がすごく多いんヨ。ここまで運べん  
から、下で待ってもらおう」

「あば、わたしが行くヨ。せめて日陰に入っ  
てもらおう」

そう言うが早いか、フミは、たんたんと階  
段を駆け下りていく。九月になっても、陽射  
しはまだまだ強い。

炎天下のなか、三人と八個の荷物は、静物  
画のようにじっとたたずんでいた。

「すみませーん。いま車来ますんで、裏のほ  
うで涼んで待っついてください。荷物はその  
ままでもいいです」

組合ビルの裏手へ案内する。そこには表か  
らは想像できない、美しさにあふれた庭園が  
あった。庭の中央にはパラソルとテーブル、  
テーブルを囲んで四脚の椅子もある。漁師さ



んの一人に草木の好きな人がいて、ゴーヤだのハーブだの花だのを育てている。魚よりも本当は草木が好きなのだというその人は、カツオ漁を引退し、陸に上がる日を何よりも楽しみに生きていた。

「どーぞ座ってください」

「ああ、どうもありがとうございます」

母親らしき人が初めて声を出した。紺の水玉の、涼しそうなワンピース。突き出た二の腕が真っ白に輝いている。

娘のほうは脚をピツタリ覆う細身のスパッツと、上はだぼつとしたTシャツの装いで、座ったとたん、自分のリュックのなかからスマホを取り出すと、一気に画面に吸い込まれた。そこにいるのに、もうどこにもいないみたいだ。そしてその傍らに、父親らしき人影のように立っている。

「東京からですか」

誰にもなく、三人の中心に向かって聞く。

「ええ」と奥さんが控えめに答える。

「娘さん、高校生ですか」

顔もあげない娘のかわりに、ここでもまた、母親が頷いて答える。

「十六になります。挨拶もできないで……。

わたしたち、実はこちらに移って来たんです」  
やっぱりそうなのかと思いつながら、フミの  
こころのなかに複雑な感情が広がっていく。

十年前、フミもまた、父母と、まだ幼子だった弟の烈れつとで、母の生まれたこの島へやってきた。島には母の母、フミたちがばっちゃんと呼ぶおばあが一人暮らしをしていて、フミたちは、その敷地のなかに二階屋を建て住み着いた。身体の芯には、まだトーキョー弁が残っている。おもいがけないとき、ひよっこり出てくるそれは、自分でもびっくりするほど冷ややかな感触があつて、フミはそのときだけ、違う自分に内側から触れる。

「わたし、この建物の上で、事務のアルバイトしてるんです。困ったことあったら、なんでも言ってください。うちはこっから、少

し歩いたところ。おかあさんとおばあさんと、  
中学生になる弟と住んでます。ハマシマ、い  
います」

内面には何重にも鬱屈を折りたたみながら、  
フミは人に対するとき、せいっぱいの笑顔  
で、よき娘を演じる。

「ミ、チ、シ、タです。お世話になります」  
ここから出ていきたい自分とは入れ違いに、  
こうしてこの島へやってくる人もいる。彼ら  
もいずれは島になじみ、島の顔になっていく  
のだろう。島の顔——そういうものが確かに  
ある。ここに来たばかりの頃、フミは地元の  
人々のなかに、母とよく似たまなざしを見つ  
けては、まるで島全体が一大家族のようだと  
思った。黒く豊かな毛髪、樹木の幹にも似た  
がっしりした体つき、始終、眩しそうに目を  
細める仕草。自分自身のなかに、同じものを  
確認した頃、フミもまた島の人間になったの  
だろうか。眉といい髪の毛といい、毛髪こそ  
がこの土地と自分とを、縄のような絆で繋い

でいると思う。

なのにこのごろのフミは違う。その絆を断ち切っても、羽ばたき海を渡りたい。

かつて人から、アサギマダラという蝶を教えられたとき、フミは興奮した。旅する蝶、アサギマダラは、島から本土へ、本土から島々へ、あの繊細な羽を震わせながら、はるばる何千キロという沖合を一心に渡るといふ。

フミのなかにも、彷徨いでてゆく蝶のようなものがあつた。けれどそれは行動を伴わない。心の底には行き場を失つたエネルギーが、怒りのようなマグマとなつて溜まり、フミを時折、寡黙な暴徒にする。――出ていくんだ、何もかも捨てて、明日にでも出て行ってやる。

その明日が、今は日一日と延長されていた。フミの目の裏に、カツオのどす黒い赤身が蘇る。数年前の夏、そんな暗紅色のスカートをはいた女が、いきなり家を訪ねてきた。

目の細い、遠慮がちな物腰のその人は、見るからに島の人ではなかつた。その日、西日

のさす六畳間に額をこすりつけ、いっしょに  
ならせてくれと母に頼んだ。彼女の言う相手  
とは、眼の前にいる女の夫であり、フミと烈  
の父親だった。なんてずうずうしい人。なの  
になんて涼しい声の人だったろう。あの人が  
手土産に持ってきたのは、重い重いスイカ。  
母はそれを彼女が帰ってから、ドツコラシヨ  
と持ち上げ、平然とした顔で庭にぶん投げた。  
すいかは面白いようにぱっくり割れた。ま  
るで、ニンゲンの頭のようにだった。赤い果肉  
と黒い種が、地面に飛び散り、割れて潰れ、  
フミはそれを見ていた。烈も見ていた。フミ  
と烈はいっしょに並び、破壊されたスイカを  
じっと見ていた。

誰も片付けないスイカに、いく日も激しい  
陽がふりそそいだ。果肉からは腐臭が漂い始  
め、無数の蠅が群がった。巨大なアリもやつ  
てきた。犬、猫、鳥、鼠、ごきぶりも。みん  
なみんな、崩れた果肉を食ったにちがいなか  
った。

それでも父は、四方から押し潰されたような顔をして、しばらくは家にいた。ぎくしゃくとした日々が長く過ぎ、ついに父が家を出ていったのは去年の夏だ。どす黒く焼けた父の襟首。破壊されたスイカの夏。

家を出るといふことは、この島を出るといふこと。あの女といっしょになるのか。聞けば母は、知らんと言った。忘れなさい、覚えておいたら病気になるサー。ほうらみてみい。アタシはもう忘れた。

父が出ていったその日にもう忘れたと、母は笑ってフミに言った。

フミはフミで、また別の不安にとらわれてもいた。明日からの食卓に、新鮮なカツオの刺し身はもう並ばないんじゃないか。父はこちらに来てからカツオ漁を覚え、島独特の漁法で、一家を支えた漁師だった。刺し身だ、なまり節だと、食卓には、ほぼ一年を通して豊富なカツオ料理が並んでいた。

確かに食卓は寂しくなった。でもそれは、

カツオのせいではなかった。カツオなら、いくらでも変わりなく、テーブルの上にあった。家の近くにあるマルコシスーパーで、朝捕れたものが柵で売ってる。だが父の不在を埋めるものはない。父は根こそぎ、いなくなった。

二度、軽く、クラクションが鳴る。シモジのおじさんだ。「お泊りは桜やと聞いています」フミは三人にさりげなく確かめる。奥さんが頷く。表へまわると、シルバーのミニバンがとまっていた。

仏頂面をして、次々、荷物を積み込んでいるおじさんの耳もとに、フミはこっそり忠言するのを忘れない。「ここから桜やまで、一本以上、とつたらいかんよ」。一本とは千円のこと。品行方正とはいかぬおじさんも、フミの言うことだけは、おとなしく聞く。

ミニバンは、桜やに向けてゆるゆると出発した。

「フミ、気になったト」

いつのまにか勝男が横に来て言った。

「何があ」

「あの家族サー。おまえ、東京に戻りたいんだろ」

フミは黙っていた。自分でも、自分の気持ちがよくわからない。へわたしは東京に戻りたいのか。いいや、戻っても、そこには自分の居場所などあるはずもない。けれど島を出て海を渡りたい。その先には、やっぱり東京がある。ある。

フミがそこを目指していく以上、どうしたって戻るのではなく、行くのである。それにしても東京とはなんだろう。十歳まで暮らしたのには足立区の綾瀬。新宿、渋谷、原宿、銀座など、フミには遠い町だった。どこへ行こうと、そこで自分の小さな足場を作り、気の遠くなるような日々を重ねる。それを思えば、どこで生きようと同じなかもしれない。母とばっちやと弟が、フミにとっていつしか、自分が守らなければならぬ、そんな存在に



もなりかけていた。

島に生まれた勝男は、島を愛し、島で生きることについて一点の疑いも持っていないように見える。そうして島以外の土地や人に、何かと批判的な目を向けては、やっぱりここが一番だと言う。いつからあんなに保守的な、島ラブの塊になったのだろう。複雑な思いで勝男を見る。

「フミ、いいことを教えてやろうか」

「なんね」

「シロマさんちの裏手に、涸れ井戸あっただろ？」

「ああ」

「けさあ、真水がいきなり湧いてきたんだと」

「あばあ、ほんと？　ほんとなの？」

「見てこい、見てこい、すんごいぞーきれいな水ネー」

みるみるうちに、フミの瞳が濡れ、輝き出す。小さなころから、「水」が好きだった。透明な水が。少女の頃は、いつか水売り商人に

——そんなものがあるとして——なりたいたいという奇妙な夢さえ持っていた。綺麗な水を見るとフミのなかに、誰に捧げたらよいのかわからない感謝の念が湧く。綺麗な水、綺麗な水よ。

島の周囲には透明な海が広がり、真っ白な砂浜に波が打ち返している。今のフミにとっては、当たり前前の光景だが、当たり前前は当たり前前ではないのだとぼっちは言う。ぼっちはやがて一体、何を見てきたのか。自分の過去を、つぶさには語らなかつたけれども、汚れた水がどんなに恐ろしく、どんなひどい害を人間にもたらすのか、彼女は知っているらしかった。

その日の夕刻、井戸のまわりには、女たちばかり四、五人が集まっていた。ああ、いいなあとフミの胸は、それだけでもういっぱいになる。そこが涸れ井戸だったころには、そんなふうに誰かが集うこともなかった。集落

はいつでももしいんとして、人の気配がしななかった。からからになった井戸の底には、どこからか運ばれた種が芽吹き、人はここを、へ草の井戸〜と呼んだ。

「水が湧いてきたってえ？」

興奮を押さえながら近づいていくと、みんながいっせいに丸い目でフミを見た。

「誰が言ったのお」のシロマのお婆さん。

「勝男に聞いた」

「おしゃべりだねえ、あいつは」

「言ったら悪いの？」

「そんなことはないけど、これはべらべら喋るものと違うヨ。静かに祀まつらにば。あんたんとこのばっちゃんには真っ先に告げたさあ。ハナさんが予言しとったとおりになったんだからヨオ」

日頃、何でも開放的なお婆さんが、声を潜めるので、フミはおかしい。

「ばっちゃんが予言？」

「島の井戸がそろそろ開くと」

「ああ、そんなこと、言っとったネー。こうして湧いてくるまで、すっかり忘れてた」

「島の涸れ井戸は三つあるんヨ。湧いてきたのはここだけ、奇跡ナヤ」

そう、そうとうなずきながら、集落のおばさんたちも顔をほろこばす。

「ふしぎちゃー、ふしぎヨオ」

「ふかどうくるところから湧いてきたトー」

「いつむとう、だあいずな水」

皆、かわりばんこに井戸をのぞきこむ。その面が、そのままばかりと井戸に落ちるようおもてな気がしてフミは怖い。そんなバカなことがおこるわけがない。おこるわけがないのだが、けれど何も起こらないうちから、妄想が次々浮かんできてしまうのは、フミの困った癖である。

女たちに促され、フミも井戸のなかをのぞきこむ。ほつぺたを思わず押さえながら。底のほうに、ふるふると揺れる暗い水が見えた。その暗さに秋の青空が溶け込んでいた。

幼かった弟は、ここを通るたび、可愛い声で唱えたものだ。

ニゴウ、ワキテオクレ（願う、湧いておくれ）、ニゴウ、ワキテオクレ（願う、湧いておくれ）、水の好きな姉のために、烈はそんな「願イ」をかけたのだった。あの声が、水を地上へと呼び上げたのだ。

三人家族の住み家は、その井戸からもごく近い、同じ集落のなかに見つかった。島の仲間から、二本、道を奥へ入る。鉄筋コンクリート二階建ての家壁には、真新しいクリーム色のペンキが塗られ、くすぶった境界では特別目立った。勝男の話によれば、あのシモジのおじさんが、家の手配から修繕までを一人で請け負ったのだという。愛想は悪いが手先が器用なおじさんは、白タクの運転手ばかりでなく、ある時には幹旋業者、ある時にはリフォーム屋、あるいは電気屋、はたまた水道屋と、なんにでも変身する。

住民が激減しているこの島では、空き家はいたるところにごろごろあった。けれど住む人を失った家は、急速に衰え廃墟となる。再びそこを住居とするには、多くが内部の修繕を必要とした。かつての住人は、死んだか島を出ていったか。その残影に挨拶をして、ここに暮らすよ、守っておくれと頭を下げる。この島に暮らすということとは、そんな見えな  
い存在とも、つきあっていくということだった。

「じゃけど」と勝男が言う。

「あの一家の旦那さんは、なーんもしやべらんね。どんな声をしとるか、フミ、聞いたことあるか？ 一つつもしやべるんは、奥さんばっかりじゃ」

「ああ、そうやね」

「なあんでこんなとこに一家で来たト？ だあれも知らん」

「知らんでいいのよ」

「フミはいつつもきれいごと言うとして。な

んーか悪いこととして、本土に住めんようになってたんと違うんか？　そうに決まತ್ತとる」

かつての自分たちのことまで言われたような気がして、フミは思わずムキになる。

「こら、勝男、根拠もなく、いい加減なことを！」

「こらとは何じゃ。フミは女じゃなか。男でも女でもない。ガ我がーズがー強い、オニババじゃ。すでになっとする。さっさと山行けや」

「ドウモ、ドウモ、オニババ、上出来ネ」

島には子供でもよく知る、オニババの山ごもり伝説があった。結婚せず、子を産むこともないまま年老いた女が、ある年になると山へ入り、木の実や木肌をかじりながら、だんだんと食物を絶ち、穴のなかで餓死を選ぶ。そういう女たちのことを、フミもばっっちゃから幾度か聞かされた。

それを語るばっच्याの声には、哀れみとともに慈しみと同情がこもっていた。さらに言うなら、そんなオニババにばっच्याは自分の

身を重ねているようでもあった。自分にはたとえ家族がいても、女なら、誰もがオニババの孤独につきあたる――きつとそんなふうに感じていたに違いない。フミもまた、オニババを思うとき、悲しみの先にある「満天の自由」に触る気がする。自分で自分に始末をつけることには、とてつもない覚悟と孤独があるろう。それでも人は一人では死ねない。最後に、穴のなかで、皮と骨になった亡骸を、片付けにやって来る清掃人たちがいる。生前には話をしたこともなく、死後、それだけの縁でつながれた人々だ。

ひゅーっと身の内を風が通っていく。

それにしても、目の前にいる、この目障りな間抜け面。

「あんた、よくよく考えてみ。井戸の水が湧いたのは、三人家族が来てからのこと。三人は神様かもしれんヨ。過去をほじくりだすのはヒマ人の仕事ネー」

そこまで言うと、勝男はようやくおとなし



くなつた。あの寡黙な旦那さんの声を聞いて  
みたいという気持ちは、フミとて同じだった  
けれど、それを口にして勝男と同じ土俵に下  
りたくはない。

「だいたい、しゃべらんでも、ニンゲン、死  
なんヨ。勝男はおしゃべりやから、わからん  
ネー、寡黙の意味が」

「カモクってなんや。難しい言葉でごまかす  
なや、フミ」

フミはふっと気が抜けてしまつて、もうこ  
れ以上、勝男と口喧嘩をする気にもなれなか  
つた。

三人家族の家は、フミの家からもそう遠く  
ない。生活ぶりが謎めいているので、どうい  
うふうにつきあつていったらいいか、集落の  
人々は少しばかり戸惑つていた。奥さんはあ  
まり人を頼らず、多くを自分で、あるいは金  
の力で、なんとか解決してしまおうとする。  
旦那さんのほうは度を越して無口で、常に自

分のなかに閉じこもっている。しかも働いている様子がまったくみえない。なかには、勝男のように彼を前科者扱いする者まで現れた。

かろうじて明るい話題にのぼるのは高校に通う娘だった。彼女は毎朝、早い便の船で、隣の馬島にある学校に通っていた。フミの仕事時間とは微妙にくい違い、行きも帰りもかちあうことはなかったけれど、その姿をよく目にするとという勝男の話によれば、人が違ったように明るくなって、「生魚みたいに色っぽくなった」という。それを聞いたとき、フミは嫌悪感で皮膚が泡立った。

「相手は高校生。いやらしい目で見るなや、勝男」

「わかつちよるワ。ヤキモチやくな、フミ」

「あれー、よく言うワ。ヤキモチと違う、勝男はナルシストやね、終わってる」

「なんやと、オニババア」

何かと言えばオニババア。勝男は、まるで小学生だ。

フミは確かに、「色っぽい生魚」というタイプではない。どちらかといえば植物のようだ。花ではない。土地に根を下ろした樹木のようである。魚ならば、水を伝ってどこへでも行ける。けれど木は、木であるならば、土地から離れると枯れてしまうかもしれない。

十月。島に暴風と雨が吹き荒れ、それは三日間止むことがなかった。台風が去ったとき、キビ畑を渡る風に、よそよそしい不穏さはわずかに残っていたものの、いきなり青空がかっと広がり、太陽のひざしが降り注いだ。土はよろこび、夏が再び戻ってきたかのようにだった。けれどそれはもう、フミのよく知る、盛りの夏ではなかった。

ある日、いつもより事務所を出る時間が遅くなったフミは、ちようど下船してきた、あの一家の娘と鉢合わせになった。あつと思つたが、口から出てきたのは、「一緒に帰らん？」という言葉だった。家の近所で行き交つたと

きには、今までにもおじぎくらいすることはあった。けれど二人で親しく話したことはない。娘は少し警戒した様子だったが、いつしか並んで歩き出していた。

勝男の言うような生魚めいたところはなく、フミに見せる表情は、健康な女子高生そのものである。しかし「生魚」とは、女が女には、ついに見せない部分なのかもしれない。

「どうですかあ？ こっちの生活、慣れました？」

「はあ。いい感じですよ」

いいじゃないかと、いいと言いつつ、そのままの高さで「感じ」へと流れる。

「船の通学だよ？ 楽しんでる？」

「それだけはまだ、ダメなんです」

「乗ってる時間はどのくらい？」

「三十分くらいかな。船酔いして、いつつともどしちやう」

「そっか、それは辛いね」

自分も来たばかりの頃は、そうだったかも

しれない。そう思いながらフミは、いつ慣れたのだらうと記憶を探る。夏が終わったとはいえ、娘もフミもまだ半袖で、細く白かった娘の腕も、こんがりといい色に焼けている。頬のあたりには、そばかすが可愛らしく散っていた。

「けど高校はスゴク楽しい。こっちに来てよかったです」

「ほんとー？　島は狭いし、噂広まるの早いし、楽しめないしー夢ないしー窮屈だしーまわりは海ばっかだしー」

普段はそこまで思っていない。なのにフミは、わざとのように自虐を演じた。娘はぱたぱたと手のひらをふりながら、必死にそれを否定する。

「海がはんぱなくきれい。ありえない。コンナきれいな海、見たことない。魚もたくさん。すぐそばを泳いでる。びっくりしっちゃった。それに夕焼けがスツゲ綺麗で。もう、死んでいくくらい」

「おっとー」

激しい表現に気圧されながら、フミはまぶしく娘を見た。フミ自身、近頃、朝焼けもけ夕焼けも見えていない。

気づくともう、仲通りまで来ていた。

「あの：お名前、フミさんでしたよね」

「そうだよお。誰から聞いた？」

「船をいつも操縦してくれる人」

「ああ、勝男ネ、あのひと、勝男っていうの。

忘れていいよ」

「あはっ。あのひと、フミさんにぜったい、  
気がある」

「ええ？ 迷惑だワ、それは」

「いっつも船のなかで、フミさんのこと、し  
やべってますよ。島のクイーンとか、オニバ  
バとか」

「あばー、あきれる……ところで、お父さん、  
お母さんはお元気ですか」

「ええ、みんな元気デス」

「島に皆さんが到着してから、ずっと気にな

っていたんだけど、なににもできなくて。わたし、港の事務所でまだしばらくはアルバイトしてるから、困ったことあったら、あそこへかけこんでヨ。家に来てくれるのも歓迎だし」

「はー。ありがとうございます」

別れてから、フミはまだ、あの娘の名前を知らない事に気がついた。改めて思い返してみれば、誰もが、「あの家族」とか、「あのひとたち」という言い方で、遠巻きに彼らを眺めていたのだった。

釣った魚をめぐってちよつとした騒ぎがおきたのは、十一月に入った最初の週末のこと。島から島へとかかるK大橋で、一人の釣り人が餌釣りをしていた。キビを専門に扱っている、富島農園の長男、大介さんだ。孤独な夜釣りが唯一の趣味で、その日も食事を終えてから一人でかけたという。

橋の中央付近で釣り竿を下ろし、しばらく

かかるのを待っていると、あーあーいおうー  
えーあーと切ない声がしたそうだ。まるで赤  
ん坊が夜泣きでもするような声だったという。  
その夜はまるで釣れなかったそうだが、帰り  
際、何かが竿にかかった。ひきあげて懐中電  
灯で見れば、額のせりあがった不気味な怪魚。  
気味も悪いがなぜか懐かしさもわいて、海に  
返さず、家に持ち帰ったのだという。

翌朝、いつものように朝食をすませてから、  
そういうえぼと、昨夜釣った魚のことを思い出  
した。バケツに入れたのを台所の暗所に置い  
たのだったが、それがどこにも見当たらない。  
奥さんに聞くと、今朝、三枚に下ろして人に  
も分け、すっかり食べてしまったという。  
「おまえ食っちゃったのか？」  
「あんだだって、今食べたヨ。おいしい、お  
いしいって」

大介さんはぎよつとした。透き通った白身  
の甘い魚は、南洋鯛かと思っていたのである。  
思い返すに、段々と気味が悪くなって、誰か



に話さずにはいられなくなった。

怪魚を見たという噂は島ではよく聞く。だがその多くは、単なる外来種だ。まれに絶滅種したはずの古代魚の一種が、浜に打ち上げられてニュースになることもある。そういうもののなかには、見ようによつては人間の、ことに生まれたばかりの嬰兒の顔によく似たものもある。

噂を聞きつけた一人に、とうに漁師を引退した古老がいて、それこそは「ヨナタマ」ではないかと言い出した。島に残る「人魚伝説」である。ある漁夫が釣った人面魚「ヨナタマ」を、みんなで賞味しようと、炭をおこしあぶっていたら、大津波がやっけてきて、島は人も家も牛も馬も、すべてが洗い流されてしまったという。ヨナタマは、海霊と書き、「ヨナ」とは海のこと。「タマ」は女性の名称とも、命のことだともいわれる。

最初はただ、何かよくわからないものを食ってしまったという、それだけの不安に苛まれ

ていた大介さんも、次第に顔がこわばってき  
た。時間がたつにつれ、下腹のあたりが、ど  
うも、どんより、重くなってきた。

例によつて、フミにその情報をもたらした  
のは勝男だった。夜明け前、海へ繰り出して  
いったカツオ船の漁師らが、船上での昼食も  
済ませ、下船後のひととき、例の裏庭でヨナ  
タマの話題に盛り上がっていたとき、勝男は  
一人、その輪を抜け、事務所の階段をあがつ  
てきた。

「ヨナタマ、ヨナタマ、ヨナタマがついにこ  
の島に上陸したトー」

「ヨナタマって何ヨ」

勝男はおおいに胸を張った。

「津波をおこす人魚ネー。フミは遠い島の伝  
説を知らんか。顔は生まれたばかりの赤子の  
ような。そいでもって、きゅきゅうと鳴く。  
その泣き声も赤ん坊そっくりだと」

「へーえ。どこへ行けば会えるの、その人魚  
に」

「もう会えーん。大介さんが釣って、食っちまったトー。他にもおる。仲通りの三人家族にも分けたいらしい。そこの娘も食ったとヨ。すんげえ食欲ダワ、あの子。島に着いたばかりの頃は、細っこくてなよなよしとったのに。近頃は黒豚だら。あつかましー」

「ムバあ、女、豚扱いして、あんたなんか、陸おかにあがったカツオのくせに。食ってどこが悪い？ もらったら普通、ありがたく食べるワ」

「ワルかー。ワルかヨ。ヨナタマ食ったら、津波やってくるんだワ。一つの島が、ぜーんぶ波に飲まれて、あとかたもなくなるんヨ」

勝男の黒目がひゆうっと小さくなり、勝男のすべてがそのなかに吸い込まれそうだ。

「知らーん。そんなこと。伝説にすぎん」

「それでも、やべえもんはやべえんじやー」

島にはいつとき不安が広がった。けれど結局、何もおこらなかつた。K大橋の真ん中で、お祓いをしてもらい、この騒ぎはいつたん収

まったくかに見えた。  
それなのに、赤ん坊の声が聴こえたという  
噂だけは、いつまでもしつこく残り続けた。  
気の毒だったのは大介さんで、ちよつとした  
風の音まで赤子の泣き声に聞こえるという。  
繊細な人だけにノイローゼのようになった。  
噂の魚を食べてしまったことについても、腹  
のなかに、コールトールのような罪悪感が残  
った。さらには生魚の夢にも悩まされている  
という。「食っちゃまった魚」が胃を逆流し、口  
内で突如、生き返る。ぴちぴちと尾びれがは  
ねるので、それとわかるが、吐き出したくて  
も、なぜかできない。結局それを、噛み切る  
しかなくて、勇気をもって歯をあてる。じゃ  
りじゃりと、おそろしい音がして、うろこが  
歯間にはさまってしまふのだという。それは  
もう、生々しい触感を伴った、生の経験その  
ものなので、夢とはとても思えないそうだ。  
かたまりの魚肉も喉につつかえ、んぐぐぐぐ。  
ようやくの思いで流し込むと、今度は腹の底

から、暗黒の後悔がわきあがる。鏡を見ると、自分の口の端から、食ったはずの魚の下半身が、ぺろりとほみ出しているではないか――。永遠に循環する悪夢である。

実は彼の他に、もう一人、ヨナタマに取り憑かれてしまった者がいた。フミの弟、烈である。図書室にある「島の伝説」の類を調べつくし、コンピュータで検索もして、ノートにびっしり、「研究結果」を書き付けている。普段から賢い子だったが、一つのことに関心を持つと、こうしてとことん調べ魔になった。

近頃では、ヨナタマ伝説から人魚研究、そして生命の進化論にまで興味が広がってきた。大介さんのそれより、ずっと前向きな取り憑かれ方だが、フミはうっすらと不安を覚えていた。烈が、誰も触ったことのない、生まれる前の時間に触れてしまったのではないかと、思うからだ。つまり一種のタブーの領域。「姉ちゃん、胎児はお母さんのおなかのなかで、進化の過程を一気にたどると言うよ、最

初はぼくたち、水のなかにいたんだって。それから陸にあがって、二本足で立つようになった。魚類から両生類、爬虫類、哺乳類へ。おなかのなかの赤ん坊は、かたちになりはじめのころは魚みたいな顔をしていた。そして生まれ出るまで、あの長い進化の歳月を超特急で駆け抜けるという。覚えてる？ あの素早さ。僕も姉ちゃんも、羊水って海みたいな水につかっていたんでしょ。そこにぷかぷか浮きながら呼吸していたんでしょ。ざわざわと音が聞こえた。波の音かな。きっとそうだね。母ちゃんのお腹から出てきたときも、同じ波音を聞いた。内も外もないんだ。すべてがすでに見た、聞いたものだった。ぼくはむかし、魚だったさ」

烈の話は段々と熱を帯び、確信する者の正しきで突き進む。フミは相槌もはさめない。小さなころから変わった子で、海に潜るのが大好きだった。呼吸法を習うと面白いように習熟し、段々と長く海中にすることができ

ようになった。その意味では確かに、烈は魚だ。フミは驚き、感心する。烈を見ていると、鍛錬によつては人間も、魚のように海のなかで生きられるのかもしれないと思う。けれど烈が海中に沈むとき、フミは不安で吐き気がするほどだ。これが見納めかと、毎回思う。海のなかは、それだけでなくとも危険に満ちており、予想外の事故がおきる。不安になるのももっともだったが、しかし烈はいつだって帰ってきた。海に濡れ、海を脱ぎ、怪魚めいた崇高さすら、たたえながら。もっともそれで、フミの不安が消えるわけではなかった。海上に顔を現わした烈は、果たして今までの烈と同じ人間だろうか。微妙な点で、少し違っているのではないか。海と陸では、時間の流れ方が違う。海のなかにいるあいだ、百年、二百年が一気にたったとしたら――フミの妄想はふくらんでいく。海からあがった烈が、浦島太郎のように、いきなりおじいさんになっていたらどうしよう。そ

のときは、フミ自身もすっかりおばあさんになっ  
ていているか、あるいはもはやこの世にはい  
ないかもしれないのに、おかしなことには、自  
分のことは、いつも考慮の外にある。  
ただ、烈が、自分を魚だったと黒い目で言  
うとき、姉である自分もまた、魚だったに違  
いないと思う。フミの耳に、ざわざわとした  
遠い波音が蘇る。潮に乗って流れてくる子守  
歌。母のような女の声で歌われるそれは、海  
上を渡る強い暴風に千切れそうになりながら  
も、決して途絶えることがない。歌い継がれ  
ていく、歌い継がれていく。風が切れ目なく  
吹き渡っていくように。旅する蝶が沖合を群  
なし、渡っていくように。

波間にぶかぶか浮いているのは、あれはブ  
イなどではなく、いままさに、生まれようと  
している胎児たちだ。そのなかに烈もいる。  
フミもいた。へわたしたちの生きるこの島は、  
誰かの胎内なのではないか——わたしたちは  
その誰かに孕まれている。あるいはその誰か



とは「島」自身のことでは――。

島特有の閉塞感は、一方でまた、変化・変容を必要しないほどの、完璧な安らぎを人にもたらす。そんな島に孕まれているフミが、未来のいつか、誰かをその身に孕むこともあるのだ。フミはそのことを、まだ少しも実感できない。それどころか、生き物を産むって気持ちが悪くとも感じている。生き物とは必ず死ぬものであるのだから、産むこととは同時に死を産むことではないか。

島の浜にたち、はるか遠くまで、海の広がりを見つめていると、フミはときどき、下半身がうずく。人が恋しい。誰か、誰か、このわたしを強い腕で抱いてはくれないか。その欲望は、時にするりと、子を産み落としたいという生殖の夢にも変容した。

以前、水中出産という方法を人から教えられたとき、フミにはそれが、極めて自然なものに思われた。生き物を水のなかに産み落とす感覚を、フミは経験としては知らないけれ

ど、体はすでに知っている気がする。産むと  
いうよりもそれは、何かをぬぐような感覚に  
近い。海のなかは、烈が言うように、母の胎  
内と一続きのものだ。そこはもう内も外もな  
い。どこもかしこも海である。それは赤子に  
とって、どんなに安らかな環境だろう。  
かつてフミは、「初潮」を秋の海のなかで迎  
えた。この島に来て間もないころのこと。フ  
ミは覚えている。透明な海の水に、一筋の赤  
がリボンのように流れていったこと。そのな  
かを魚たちが、フミにおこった出来事の意味  
も知らずにそよそよと泳いでいったことも。  
恥ずかしさのあまり、なかなか海からあが  
れなかった。どうしたの？　もう帰ろうよ。  
友達がやってきて、フミの手をひく。長く海  
水に浸かっていると、体と海とが一つになり、  
下半身がしびれて、我が身という感覚を失っ  
た。記憶にあるのは、海からあがるとき、と  
ても勇気がいったこと。とても痛いと思った  
こと。内股をくるぶしのほうへ、経血が降り

ていくのを感じながら、フミはどうやって浜を歩き、どう家へ帰ったのかを覚えていない。

「赤ん坊の泣き声が確かに聞こえたんヨ」

ある日、シロマのおばさんが興奮して言った。しつこく消えない泣き声の噂は、仲通りにまで広がっていた。おばさんが言うに、その声は、三人家族の家からあがったのだという。年があけた一月半ばのことだ。その噂をフミのところへ持ってきたのは例によって勝男だった。

「あの子やな。産んだのはあの子ネ」

勝男ははなから、決めつけて言った。

「まだ高校生ダラ、はらませたんワ、どこのボケや」

「ホントなの？ 赤ん坊の泣き声っておばさんの空耳じゃない？ 例のヨナタマだって赤ん坊の泣き声みたいな声で鳴くというじゃない」

「魚がこんな通りまで歩いて来っか！ ニン

ゲンの赤ん坊に決まっちよる」

フミ自身、自分の言った言葉とは裏腹に、ヨナタマだとは思っていない。そしてもし、赤ん坊だというのが本当なら、その子を産み落としたのは、あの娘こに違いないとも思っていた。

事實は、それから、いきなり明白になった。奥さんが生まれたばかりの赤ん坊を抱いて、みんなの前に現れたのだ。

日曜の夕刻、井戸のまわりで、界隈のおばさんたちはおしゃべりに興じていた。シロマのおばさん、イケマのヨシおばさん、ヤエさん、ウルカの和子さん。みんながみんな、噂の赤ん坊をはつきりと我が目で見て、言葉が何も出てこなかった。やがてばっちゃんが呼ばれ、ばっちゃんの娘、その娘の娘、つまりフミも呼ばれた。烈もついてきて、みんなが井戸のまわりに集まった。

「生まれました」

奥さんが言った。

「若いのに、どうも産後の肥立ちが悪く、娘はまだ横になっけています。みなさんにどうお知らせしたらよいかと……ひとまず代わりにご挨拶させてください」

島の産婆を探し当て、誰にも言わずに産む準備を整えたのだという。最初から打ち開けていてくれたらとフミは思い、みんなもまた同じことを思った。

「いきなりこのようなことになりました、申し訳がたたないとはこのことです。親としても目が行き届かず、恥ずかしいの一言です……」

赤ん坊はまだ、かわいいという形容の以前にある。猿のようだが、猿ではない。イキモノであるのは確かだった。魚から、ほんの一步、進化した顔がそこにあつた。

「夫はあんな状態ですから、何が起きているのかまったく理解ができていないようなんです。ただ、赤ん坊を見て、初めて笑いました。

孫とわかったのでしよう。あのちなみに：生まれたのは男の子です。名前はまだです。名無しです」

名無しという言葉が、その場に矢のごとく放たれて、空気が清んだのがフミにわかった。奥さんが、旦那さんのことを口にしたのも初めてのことだ。フミは赤子を産んだ娘の気持ちをしる。家の奥で、一人、横になっている若い母親。誇らしいだろうか、恥ずかしいだろうか、それともまだ何も考えられないのだろうか。フミが超えられなかった一線を、若い彼女は軽々と飛び越えた。

奥さんに抱かれた赤ん坊は、糊付けされたみたいに目を開かず、こんもりと丘のように腫れたまぶたを陽にさらして眠っている。その顔が、一瞬、ゆがみ、揺らめき立ち、そこに老賢者のような、ひどくろうたけた面影が涌いた。フミがびっくりして見つめていると、次の瞬間には怪魚のような醜貌が現れ、そこからすすまじい勢いで、カエルからへび、ト

カゲへと変怪し、再びサルに似た、赤ら顔の  
嬰兒になって、はつきりと一度だけ、黒目を  
あけ、フミを見た。

あつと思つた、次の瞬間、再びその目は縫  
い付けられた。めまぐるしい種の変化が、今、  
赤ん坊の顔の上を疾風のように通り過ぎた。

何が起きたのかとフミはまばたきをする。  
生きることの反対語は死ぬことではない。生  
きることと死ぬこととは裏返しと同じこと。  
生きよ、フミ。どこからか、降ってきた声は、  
虹のように発光してフミを照らす。

かつてこの島は、「匙の島」と呼ばれた。匙  
を古語では、「かひ」と読ませる。古には匙が  
貝殻で作られたのだと言う人もいた。そもそ  
も島全体が匙のかたちをしている。そのこと  
は、今では誰もが知ることだが、島全体を見  
下ろす視線を持ちようもなかった昔の人が、  
どうやってそれを知ったのだらう。歩いて測  
り、確かめたことを、紙の上に一つ一つ描き  
足していったのだとしても、そこには膨大な

時間が費やされたに違いない。

島で一番の古老は語ったものだ。われわれは、カミサマのひとすくい匙のなかで守られている。人が生涯、どんなにもがき、どれほど島から遠くへ行ったとしても、つまりはこの匙の池のなかで、東の間の水遊びをしたにすぎない――。

「島に赤子が生まれたんは、どれほど久しぶりのことやろう」

「祝いの儀式もせねばなるまい」

ばっちやたちの声に、フミは再び現実に立ち返る。島に伝わる赤子の儀式は、ここ半世紀のあいだ、執り行われていなかった。木製の匙で綺麗な水を汲み、赤ん坊の口をしめらすのだ。そのことで、新しく誕生した彼あるいは彼女を、島の一員に迎え入れる。

冷静に考えれば、事後の問題はいろいろあった。なにしろ母親は高校生だ。これからどうするつもりだろう。どうしてやるのがいいのかだろう。



しかし井戸のまわりに集った人々は、誰も誰の子かと聞かなかった。男の役目は終わったようだった。女たちは、まるで自分に授かったかのような有り難さで、赤子の誕生をよろこびあった。

（終わり）